



藤原顯長銘壺片(「從五位下
惟宗朝臣遠清」銘部分)
大アラコ古窯



象嵌の入った鐸 寺西1号墳

はじまりは考古学

— 木造校舎時代の愛大で —



耳環 炭焼平27号墳



小玉 地部道1号墳



土器棺
河原田遺跡



入館
無料

2018年1月9日
5月18日

会場：大学記念館(豊橋校舎)

開館：火～土曜日 10:00～16:00 (12～13時を除く)

休館：月・日曜日・祝日

きざみ梯子
坊入遺跡



愛知大学
AICHI UNIVERSITY

総合郷土研究所

はじめに

大学創立から間もない昭和22年（1947）秋、本学予科教授 横山将三郎は愛知大学考古学会を創設し、坊入遺跡（豊川市）などの発掘調査を手がけました。ここから、愛知大学の発掘調査の歴史がはじまります。昭和25年（1950）に総合郷土研究室（翌年総合郷土研究所となる）が設立されると、横山はここを拠点として宮西遺跡（田原市）や炭焼平古墳群（豊川市）などの多くの遺跡を発掘しました。

昭和40年代に入ると、文学部史学科は教授歌川學・講師大参義一（名古屋大学から出講）を中心に、河原田遺跡（豊川市）や寺西1号墳（豊橋市）などの調査を実施しました。また比舍古古窯（豊橋市）など学生主体で行われた調査もありました。

それから半世紀以上がたち、残された遺物は混乱状態となっていました。そのため、当研究所では再整理を実施してきました

1. 愛知大学発掘調査の歴史

年 月	主なできごと
昭和21年11月	愛知大学の設立が認可される。
昭和22年1月	愛知大学が開講する。
10月	横山将三郎教授が愛知大学考古学会を設立。
昭和22年11月～ 昭和23年11月	瓜郷遺跡の第1～3回発掘調査に横山将三郎教授・愛知大学考古学会の学生が参加する。
昭和24年6月	坊入遺跡（豊川市）の発掘調査を横山将三郎教授が実施する。※当時は国府遺跡と呼称した。
昭和25年5月	愛知大学に総合郷土研究室ができる。
昭和26年6月	総合郷土研究室が総合郷土研究所と改称する。
7月	向山5号墳・地部道1号墳・籠田遺跡（いずれも田原市）の発掘調査を横山将三郎教授が実施する（註1）。
9月	渥美半島の遺跡（北屋敷貝塚・伊川津遺跡など）の現地踏査を横山将三郎教授が実施する。
昭和27年6月	野田村・神戸村（ともに田原市）の古墳調査を横山将三郎教授が実施する。
7月	神戸村（田原市）の古墳調査を横山将三郎教授が実施する。
10月	宮西遺跡（田原市）の第1次発掘調査を横山将三郎教授が実施する。※当時は大久保遺跡と呼称した。
昭和28年3月	宮西遺跡（田原市）の第2次発掘調査を横山将三郎教授が実施する。
昭和29年6月	雁合遺跡（田原市）の発掘調査を横山将三郎教授が実施する。
12月	総合郷土研究所所長に横山将三郎教授が就任する。考古学研究室が、教室棟から出火した火災で類焼。遺物は展示会に出品中のため無事であった（註2）。



中部日本新聞
昭和22年10月7日付



坊入遺跡発掘時の記念撮影（戸谷茂信氏提供）



中部日本新聞 昭和29年6月17日付

昭和 30 年 10 月	仏餉遺跡（豊橋市）の発掘調査を横山将三郎教授が実施する。
昭和 31 年 5 月	文学部に史学科が開設され、歌川學助教授が赴任する。
7 月	梅田川流域（豊橋市）における窯跡踏査を横山将三郎教授が実施する。
10 月	南高田遺跡（豊橋市）の発掘調査を横山将三郎教授が実施する。
昭和 32 年 7 月	炭焼平 27・28・29 号墳（豊川市）の発掘調査を横山将三郎教授が実施する。 ※当時は炭焼平 1・2・3 号墳と呼称した。
11 月	川田原古墳群（新城市）の現地踏査を横山将三郎教授が実施したという記録があるが、詳細は不明。
昭和 33 年 6 月	東原 4・5・6 号墳（豊川市）の発掘調査を横山将三郎教授が実施する。 ※当時は上長山 1・2・3 号墳と呼称した。
7 月	津具村天狗棚の黒曜石層と行人原遺跡（ともに北設楽郡設楽町）を横山将三郎教授が調査する。
8 月	東原 5・6 号墳（豊川市）を愛知大学構内の哲学の森へ移築する。
昭和 33 年 秋	徳台遺跡（豊川市）の発掘調査を横山将三郎教授が実施する。
昭和 34 年 1 月	一宮村（豊川市）の古墳調査に横山将三郎教授が着手するも、体調を崩し未完におわる。
2 月	前月、古墳調査中に倒れた横山将三郎教授が死去（享年 61 歳）。
8 月	西原 26 号墳（豊川市）の発掘調査を、文学部史学科が歌川學助教授・浅若晃教授を中心に実施する。これを澄田正一講師（名古屋大学から出講）が指導。 ※当時は東才原古墳と呼称した。
9 月	篠束遺跡（豊川市）の調査に、歌川學教授と日本史専攻会考古学部会が参加する。
昭和 35 年 6 月～ 8 月	吉祥古墳群（豊橋市）の発掘調査を、文学部史学科が歌川學助教授・浅若晃教授を中心に実施。これを澄田正一講師（名古屋大学から出講）が指導。 ※当時は西川吉祥古墳群とも呼称した。
昭和 39 年 8 月～ 9 月	年長 1 号墳（豊川市）の発掘調査を日本史専攻会考古学部会が実施する。これを大参義一講師（名古屋大学から出講）・歌川學助教授が指導。 ※当時は足山田 55 号墳と呼称した。

天伯原の住居跡調査

~~~~愛大総合郷土研究所が進める~~~~



発掘の土器をみる横山教授

ツボなど発掘

「瓜郷」と「野依」の中間か

[illegible]

清  
**聴雀**  
キクツル  
稲松酒造

中部日本新聞 昭和 31 年 10 月 31 日付

多数の土器発見

一宮村 古代人の遺跡にメス



発掘作業にあたる翌大考古学研究会の一行

[illegible]

中部日本新聞 昭和 32 年 7 月 23 日付



校庭に作られた上長山の古墳

校庭に古墳を再現

愛大で珍しい原型復元

[illegible]

中部日本新聞 昭和 33 年 8 月 28 日付

|                               |                                                                                           |
|-------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 昭和 39 年 10 月                  | 比舎古古窯（豊橋市）の発掘調査を愛知大学日本史専攻会考古学部会が実施する。これを歌川學教授が指導。                                         |
| 昭和 40 年 11 月                  | 河原田遺跡（豊川市）の発掘調査を文学部史学科が実施する。これを大参義一講師（名古屋大学から出講）・歌川學教授が指導。                                |
| 12 月                          | 寺西 1 号墳（豊橋市）の発掘調査を、文学部史学科が実施する。これを大参義一講師（名古屋大学から出講）・歌川學教授が指導。                             |
| 昭和 40 年 12 月～<br>昭和 41 年 5 月頃 | 河原田遺跡（豊川市）の不時発掘を文学部史学科の学生有志が実施する。                                                         |
| 昭和 41 年 5 月                   | 有足古墳（豊橋市）発掘調査を日本史専攻会考古学部会が実施する。これを歌川學教授・古瀬吉秀副手が指導。                                        |
| 昭和 42 年 9 月～<br>10 月          | 荒木 2 号墳・下角庵遺跡（ともに豊橋市）の発掘調査を、文学部史学科が実施する。これを大参義一講師（名古屋大学から出講）・歌川學教授が指導。                    |
| 昭和 43 年 3 月                   | 川田原 15・16・22・23・24 号墳（新城市）の発掘調査を文学部史学科が実施する。これを大参義一講師（名古屋大学から出講）・歌川學教授が指導。                |
| 昭和 45 年 4 月                   | 新道 B 古窯（田原市）の現地踏査を日本史専攻会考古学部会が実施する。                                                       |
| 昭和 45 年～<br>昭和 47 年           | 愛知県教育委員会から「重要遺跡指定促進調査」を委託され、文学部史学科が東三河地域の遺跡の調査を実施する。これを井口喜晴助手が指導。                         |
|                               | 総合郷土研究所にまとまった遺物が保管されている発掘調査はここまでである。<br>昭和 40 年代後半以降（1970 年以降）、愛知大学の地域史研究は新たな局面を迎えることとなる。 |

- この年表は総合郷土研究所に遺物が残されている事柄について取り上げるのを基本とした。調査年月日などの詳細がわからず取り上げていない調査事例もある。
- 愛知大学日本史専攻会考古学部会（通称：史学科考古学研究会）は、この後も昭和 51 年～昭和 55 年に普門寺（豊橋市）の調査を実施。昭和 56 年～昭和 63 年には西三河の横穴式石室の調査・集成を行なうなど活発に活動した。
- 上記とは別に、愛知大学には「考古学研究会」という名称の同好会もあり混同しやすいが、そちらも東原遺跡（豊橋市）の調査を行なうなどの活動を行っていた。

註 1) 地部道 1 号墳・向山 5 号墳・籠田遺跡の調査年について、発掘調査報告（横山 1955）では昭和 27 年 7 月 18 日から調査を始めたという記述があるが、これは誤りである。実際には前年の昭和 26 年 7 月 18 日から 23 日に実施した。昭和 26 年 8 月の野田村村長宛て「発掘報告概要」と、「愛知大学総合郷土研究所 所報」第二号に掲載された「渥美半島の古跡調査について」がその根拠となる。

註 2) 横山教授は自身の研究室を「考古学研究室」とし、そこに遺物を保管していた。この研究室は昭和 29 年に火災で焼失してしまった。総合郷土研究所に遺物が保管されるようになったのは、その火災の後のことであろう。具体的には、郷土研が本館（旧第 15 師団司令部庁舎）から旧歩兵第 60 聯隊将校集会所の建物に移転した昭和 31 年からと推測される。



中日新聞 昭和 40 年 11 月 27 日付



中日新聞 昭和 40 年 12 月 10 日付



中日新聞 昭和 43 年 3 月 28 日付

## 2. おもな資料紹介

### 縄文・弥生時代

#### 北屋敷式土器

北屋敷貝塚（田原市石神町）

北屋敷貝塚は、縄文時代中期中葉の「北屋敷式」土器の標識遺跡です。愛知大学にはこの貝塚で採集された小さな土器片が6点あります。この貝塚から出土した土器は極めて少なく、ほかには南山大学や豊橋市が所蔵するものが知られているだけです。

愛知大学が所蔵する6点のなかには、標識資料の北屋敷式土器が1点含まれています（下掲写真）。北屋敷式の特徴は「く」の字形の爪形文が、びっしりと連続する点なのですが、この資料は「く」の字が丸みを帯び、一つ一つの間隔が大きくなっています。

このほか、これまでこの貝塚では見つかっていなかった里木Ⅱ式（縄文中期後半）の土器も含まれており、貝塚の造営期間を知る上で注目されます。



（荒木）

#### 河原田遺跡の土器棺

河原田遺跡（豊川市御津町）

弥生時代に死者を埋葬するのに用いた土器の棺を「土器棺」といいます。河原田遺跡では、10基の土器棺が見つっています。

ここに展示したのは、5号土器棺墓と名付けられた墓に棺として埋葬されていた土器のセットです。大きな壺を棺（棺身）とし、逆さまにした甕を帽子のようにかぶせて蓋（棺蓋）とした弥生時代中期（瓜郷様式段階）のものです。

棺（棺身）の壺は、頸から上をわざと打ち欠いて加工しています。遺体（もしくは遺骨）を収納するために、棺の入り口を広げたものと考えられます。



（栗原）

#### 河原田遺跡の外来系土器

河原田遺跡（豊川市御津町）

弥生時代の人びとは、近隣地域はもちろんのこと遠く離れた地域とも交流していました。河原田遺跡からは、遠く離れた地域の土器や、それとよく似た土器が見つっています。

このような外来系の土器を時期別に見てみると、東西にわたる広範な交流のあり方が反映されていることが伺えます。

まず図1を見てみましょう。弥生時代前期後葉の河原田遺跡には西から（伊勢方面から）物資や情報がもたらされました。

次に図2です。弥生時代中期前葉も河原田遺跡と西方（今度は尾張方面との）ネットワークは続きます。

そして図3です。弥生時代中期中葉になると、西方との（尾張方面との）結びつきに加えて、東方から（遠江方面から）も物資や情報がもたらされるようになりました。まさにクロスロードです。



弥生時代中期前葉の外来系土器（厚口鉢）

海をわたり、山を越え、人と物が行き交う場所、河原田遺跡がそんな集落だったことを外来系土器は教えてくれるのです。

（栗原）



図1 弥生時代前期後葉



図2 弥生時代中期前葉



図3 弥生時代中期中葉

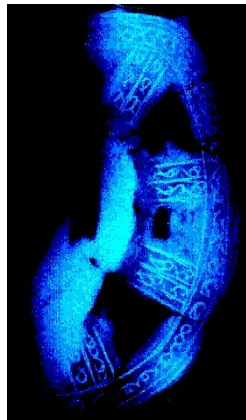
## 古墳時代

### 象嵌で飾った鐔

寺西 1 号墳（豊橋市石巻小野田町）

昭和 40 年（1965）、寺西 1 号墳から膨大な量の鉄鏃とともに大刀・剣が出土しました。この古墳からは、装飾須恵器や乳文鏡も出土しており、ひとつの古墳の出土品としては目を引きまします。墳丘も比較的大きく、中級有力者の古墳だと考えられます。

そのため、大刀の鐔に象嵌があるのではと思い、愛知県埋蔵文化財センターのご協力を得て X 線透過撮影を実施しました。その結果、鏃の下に象嵌による文様が隠されていることが明らかとなりました。X 線写真は表裏一体で写るため、文様が重なって見えますが、この文様は連続波頭文様の系譜をひく C 字形です。



（荒木）

### 古墳出土の製塩土器

炭焼平 28 号墳（豊川市東上町）

製塩土器とはその名のとおり塩を作る道具です。海水を煮詰めるための容器ですから、もっぱら海辺でみつかります。ところが、ここに展示した製塩土器は海岸から 10 Km 以上も内陸にある古墳（炭焼平 28 号墳）の石室内に副葬されていたのです。

内陸部の古墳から出土したというだけでも珍しいのですが、この製塩土器にはもう一つ大きな特徴があります。それは、須恵器の坏に入れて副葬されていたという点です。このような特徴をもつ事例は、全国でも数例しかありません。

この製塩土器は、その形態的特徴などから、渥美湾沿岸地域で作られた 7 世紀後葉の小型の製塩土器と考えられます。



（荒木）

### きざみ梯子

坊入遺跡（豊川市白鳥町）

直径約 20 cm の丸太にキザミを入れて足を掛ける段とした原始的な一本梯子です。高床倉庫に架けて使いました。坊入遺跡で出土したこのきざみ梯子は上下両端を欠いており、4 段の足掛け部分が残るばかりですが、弥生～古墳時代のきざみ梯子は、もう少し長いものが一般的だったと考えられていますから、本来は 5 段くらいの足掛けがあったのでしょう。

坊入遺跡からはこのきざみ梯子のほかにも古墳時代中期の土器がいくつか出土しており、なかには靱痕の付いた土器も見つかっています。

ここに展示したきざみ梯子は、古墳時代中期に稲を保管しておくための高床倉庫に架けた一本の梯子だったのかかもしれません。

（栗原）

### 鉄 斧

川田原 16 号墳（新城市川田）

古墳の副葬品として見つかる鉄製品にはさまざまなものがあります。武器や武具はもちろんですが、鉄斧などの工具類もしばしば出土します。

古墳時代の鉄斧には 2 つのタイプがあります。斧に装着する部分がソケット状になる「袋状鉄斧」と、斧の平面が長方形の板状を呈した「板状鉄斧」です。

ここに展示した川田原 16 号墳出土の鉄斧は、柄を装着する部分が袋状となる段階のタイプです。刃先は比較的厚く、全長 11.5 cm、最大幅 7.2 cm という

大きさから実用品と考えられ、ミニチュア

儀器に比定されるものではありません。

伐採用の斧というよりも、加工用の工具にあたると思われます。



（井口）

## 古代・中世の窯跡

### 陶馬

一里山古窯（豊橋市東細谷町）

馬をかたどった奈良時代の須恵質の焼き物です。窯跡から出土しました。可愛いらしい馬ですから、愛玩品かと思ってしまうのですが、実は、祭祀で使うものなのです。

なぜ祭祀用かというと、①陶馬は生産地である窯跡のほかでは、井戸や排水溝・河川などの水辺から出土すること、②当時の記録（『続日本紀』）に、雨乞いの時に生馬を生贄として水神に捧げたという記述があるということ、などの理由から雨乞いや水に関わる祭祀を行なう時に、生馬の形代として陶馬を捧げたものと考えられるのです。

そのほかよいことを運ぶ「神馬」として祀ったり、逆に疫病などの悪いものを運んでこないようにと、陶馬の一部をわざと破壊して、厄除けにしたとも考えられます。

（荒木）



### 陶硯

新道B古窯（田原市西神戸町）

日本で硯が生産されるようになったのは、奈良時代からです。いま私たちは硯といえば石製のものを思い浮かべますが、古代の硯は陶製でした。

平安時代末ごろから陶硯に代わって、石硯が主流となりますが、窯業が盛んな東海地域では、中世に入っても陶硯が生産され続けました。

ここに展示した硯は、まさにその時代、12世紀末の陶硯です。何の変哲もない硯に見えますが、保存状態もよく、完形品で、東京の五島美術館の「日本の陶硯展」に出品されたこともあります。

これまでは、極楽古窯出土あるいは出土地不明とされてきましたが、今回の再整理で、新道B古窯出土であることが判明しました。



（荒木）

### 三河守藤原顕長の銘入壺

大アラコ古窯（田原市芦町）

これらの壺片は、有名な三河守藤原顕長の銘入壺片です。残念ながら銘文は断片的にしか残されていませんが、ほぼ同じ銘文を持つ壺や壺片が、三島市の三ツ谷新田経塚や神奈川県綾瀬市の宮久保遺跡などで発見されています。

藤原顕長は、保延三年(1137)から久安元年(1145)・久安五年(1149)から久寿二年(1155)の合計14年間三河守を勤め、鳥羽法皇や中宮藤原璋子（待賢門院）とも近い人物でした。藤原顕長の銘を持つ壺は、主に経筒外容器として使用されていることから、仏教による作善と先祖供養のために作られたと考えられています。

本所がこれらの壺片を所蔵することになった経緯は不明ですが、田原市の大アラコ古窯では同様の壺片が多数出土していますので、大アラコ古窯近辺で表面採取されたものと思われます。

（廣瀬）

朝臣

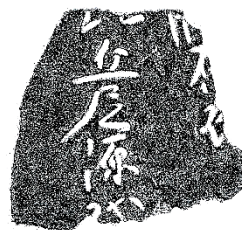
従五位下惟宗

比丘尼源氏

藤原氏

(比丘)尼源氏

(藤)原氏



内蔵氏

惟宗氏

藤原氏

## 愛知大学総合郷土研究所が保管する考古資料に関する基本文献

- 愛知県八名郡役所（1926）『八名郡誌』
- 横山将三郎（1949）「豊川市国府遺跡調査報告」『愛知大学文学論叢 第1輯』愛知大学文学会
- 横山将三郎（1951）「発掘報告概要」『村史研究関係綴』渥美郡野田村役場
- 松葉秀文（1951）「渥美半島の古跡調査について」『愛知大学総合郷土研究所 所報 第二号』
- 横山将三郎（1953）「田原町大久保遺蹟概報」『愛知大学総合郷土研究所 所報 No.6・7』
- 横山将三郎（1953）「大久保遺蹟の住居址」『愛知大学総合郷土研究所 所報 No.8・9』
- 横山将三郎（1953）「大久保遺蹟の植物種子」『愛知大学総合郷土研究所 所報 No.10・11』
- 横山将三郎（1954）「大久保遺蹟の土器」『考古学班ニュース 大久保雁合の発掘について』『愛知大学総合郷土研究所 所報 No.14・15』
- 横山将三郎（1954）「大久保雁合遺蹟概報」『愛知大学総合郷土研究所 所報 No.16』
- 横山将三郎（1955）「渥美半島の考古学的調査研究」『愛知大学総合郷土研紀要 第2輯』
- 横山将三郎（1956）「豊橋市野依町仏餉遺蹟発掘報告」『愛知大学文学論叢 第12輯』
- 横山将三郎（1956）「豊橋市野依町仏餉遺蹟」『日本考古学年報9 昭和31年度』日本考古学協会編
- 横山将三郎（1957）「籠田遺蹟」『日本考古学年報5 昭和32年度』日本考古学協会編
- 横山将三郎（1957）「豊橋市南高田遺蹟発掘報告」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第3輯』
- 横山将三郎（1958）「一宮村炭焼平古墳発掘調査報告」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第4輯』
- 横山将三郎（1959）「一宮村上長山古墳発掘調査報告」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第5輯』
- 横山将三郎（1959）「一宮村徳台遺蹟」『愛知大学文学論叢 第18輯』愛知大学文学会
- 愛知大学考古学研究会\*（1964）『郷土考古学展 三河一宮・足山田55号墳・豊清町・比舎古古窯群』愛知大学史学研究室
- 歌川學（1966）「寺西第一号墳発掘調査概報」『愛知大学文学論叢 第32輯』愛知大学文学会
- 大橋喜和（1966）「有足古墳発掘調査報告」『史誌充録 昭和四一年度 第一号』愛知大学史学研究室
- 愛知大学考古学研究会\*（1966）「河原田遺蹟」「寺西第1号古墳」『高師考古 1』
- 大参義一（1969）「愛知県宝飯郡足山田55号墳」『日本考古学年報17 昭和39年度』日本考古学協会編
- 大参義一（1970）「愛知県御津町河原田遺蹟」『日本考古学年報18 昭和40年度』日本考古学協会編
- 大参義一（1970）「愛知県豊橋市寺西第1号墳」『日本考古学年報18 昭和40年度』日本考古学協会編
- 財団法人五島美術館（1978）『日本の陶硯』
- 愛知大学文学部史学科考古学研究会\*（1979）『普門寺調査について』
- 愛知大学史学科考古学研究会\*（1980）『豊橋市雲谷町舟形山砦調査之概要—日本史専攻会・研究発表資料—』
- 檜崎彰一（1982）「日本古代の陶硯」『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社
- 北村和宏ほか（1993）『船形山城跡調査報告書』愛知大学文学部史学科日本史専攻会考古学部会
- 小林久彦（1998）「一宮町徳台遺蹟出土の土師器について」『豊橋市美術博物館研究紀要 第7号』
- 岩瀬章利（2001）「荒木2号墳・下角庵遺蹟」『高井遺蹟(Ⅱ)・荒木2号墳・下角庵遺蹟』豊橋市教育委員会
- 小野田勝一ほか（2002）『向山古墳群』愛知県渥美郡田原町教育委員会
- 須川勝一ほか（2004）『炭焼平古墳群』宝飯郡一宮町教育委員会
- 伊藤恵（2008）「付載 社本利吉氏旧蔵資料—一里山第3支群出土遺物を中心として—」『中田古窯』豊橋市教育委員会
- 栞原将人（2013）「河原田遺蹟発掘調査の記録Ⅰ」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第58輯』
- 栞原将人（2014）「河原田遺蹟発掘調査の記録Ⅱ」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第59輯』
- 栞原将人（2015）「河原田遺蹟発掘調査の記録Ⅲ」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第60輯』
- 森田（荒木）亮子（2015）「炭焼平28号墳出土の製塩土器」『愛知県史研究 第19号』愛知県
- 井口喜晴（2017）「新城市川田原古墳群の発掘調査報告Ⅰ—川田原15、16号墳—」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第62輯』
- 栞原将人（2017）「河原田遺蹟発掘50年」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第62輯』

\* 正式名称は「愛知大学文学部史学科日本史専攻会考古学部会」

■本書は「総合郷土研究所所蔵考古遺物の整理・公開」事業の一環として行なう企画展「はじまりは考古学—木造校舎の愛大で—」の展示解説として作成しました。

■本展の企画・開催は、荒木亮子(当所研究員)が担当し、栞原将人(当所研究員)がこれを補佐しました。

■本書の執筆は、第1章を荒木が担当し、第2章を廣瀬憲雄(当所所員)・井口喜晴(当所非常勤所員)・荒木・栞原が分担して行ない、各担当は各文末に( )で表記しました。

■新聞記事については、平成29年9月15日付で中日新聞社から掲載許可をいただきました。

■本展の開催にあたり、次の諸氏・諸機関よりご助言・ご協力をいただきました。

お名前を記し、心より御礼申し上げます。(敬称略、五十音順)

岩瀬章利、岩野見司、河合正樹、鬼頭剛、菅沼真衣、鈴木とよ江、戸谷茂信、永井宏幸、林弘之、藤城頭、堀木真美子、前田清彦、増山禎之、松本覚、森泰通、愛知県埋蔵文化財センター、中日新聞社

はじまりは考古学

— 木造校舎時代の愛大で —

発行日 2018 年1月9日

発行 愛知大学総合郷土研究所

愛知県豊橋市町畑町1-1